

<特集随想>外間守善先生の思い出

著者	高梨 修
雑誌名	日本文学誌要
巻	51
ページ	113-114
発行年	1995-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019806

外間守善先生の思い出

高 梨 修

私は、鹿児島県奄美大島に所在する名瀬市立奄美博物館に学芸員として勤務しております。東京で生まれ育った私が、ほとんど接点が無かった奄美という地域で現在生活しているのが不思議な氣もいたします。私が南島研究に関わるようになったのは、法政大学において外間守善先生に御指導をいただく機会に恵まれたからに他なりません。

先生を法政大学から御送りしなければならぬ時が訪れてしまったことに、歳月が経過する早さを恨めしく思います。先生を御送りするに当たり、いささかの私事を記させていただくことをお許し願いたいと存じます。

日本文学科の学生時代、先生の『おもろさうし』講義を受講したのは昭和五七・五八年のことでした。先生の講義では、壮大なスケールの沖縄文化がしばしば論じられたことを記憶しております。南島世界の時空間を自在に行き来しながら沖縄文化を解説してみせるその講義は、週に一度、本当に至福の時間が凝縮されたような楽しいひとときでありました。その頃、先生は沖縄研究国際シンポジウム「沖縄文化の源流を考える」に議長団として参加されたり（昭和五八年）、NH

K市民大学講座「沖縄の歴史と文化」に出演される（昭和五九年）等の大きな仕事をされていらっしゃいました。今にして思えば、沖縄学の第一人者として先生が沖縄文化史をまとめる作業に着手されていた頃だったと理解されるのです。

先生のそうした講義を通じて、私は次第に『おもろさうし』が生み出された歴史的背景に興味を持つようになりました。ゼミ発表でも私が歴史のことばかり報告するので、「この講義は歴史学の講義ではない」と厳しいお叱りをいただいたことがありました。しかし、南島の歴史世界に対する私の関心は高まる一方であり、凡愚の身も顧みず大学院に進んで南島の歴史（考古学）を勉強してみようなどと考えていたのです。大学四年生のある日、私は先生にその思いを恐る恐る告白いたしました。すると先生はあの優しい笑顔で微笑まれながら、「実証主義一辺倒の君は文学的センスが全然感じられないからなあ。」とおっしゃられ、「考古学の分野でがんばってみるか、沖縄研究ではこれからとても重要になる分野だ。」と励ましてくださったので、あの時は本当にホッとしたしました。それにしても先生から励ましの言葉をいただ

くと、どうしてあんなに勇気が湧いてくるのでしょうか。私以外にもそうした経験を共有している方が大勢いらっしやるのではないかと思います。

ところで先生から教えていただいたことは沢山ありすぎて、到底私の能力が及ぶところでは消化できるものではありませんでした。先生は私に「君がどんなに沖縄を愛したとしても、沖縄を内側からみることは決してできない。沖縄を外側からみなければいけない。君は大和人であり、沖縄人ではない。君の研究においては、沖縄を外側から客観的に捉える方法を探らなければならない。」とおっしゃられたことがありました。久米島のフィールドワークを行い始めた頃だったと記憶しております。最初、私にはその意味が全く理解できませんでした。南島研究を継続していく中で、先生のこの言葉は決して忘れることなく心の中で常に反芻しておりました。それから十数年を経た今日、奄

最後の授業

十二月十二日に一部ゼミでの外間先生の最後の授業があると伝え聞き、仕事もそこそこに、久しぶりに懐かしの学び舎へと足を運んだ。現役学生の中に紛れ込み、大胆にも五十分の講義を万感の思いで受け

美大島で生活するようになってようやくその意味が実感として理解されつつあるように思います。私が先生から教えていただいた研究訓として、最も大切にしている言葉です。

私は、先生に南島文学の手解きをしていただきながら、他分野の研究に進んでしまった恩知らずの教え子であります。先生からいただいた学恩にお返しするような研究が現在の私にはありません。外間先生の御寛容に期待して、全てのお許しを願うばかりです。先生の学恩に少しでも報いられるよう奄美で研究に精進いたします。

南島という素晴らしい研究フィールドに導いてくださった先生に感謝申し上げます。外間守善先生、ありがとうございました。先生の御健康と一層の御活躍をお祈りいたします。

(たかなし おさむ・一九八九年日本史学専攻、博士課程修了)

福田 由美子

た。

終業の十分ほど前になり、外間先生が二十七年間の思いを語り出そうとしたその時、八七六教室に長く…そして深い沈黙が垂れこめた。